

令和2年9月24日～12月24日まで、内地留学をさせていただき、茨城県教育研修センターで長期研修を行った。

1 内地留学の動機

- ・ 先輩の先生からの言葉「若さで子どもをひきつけられるのは30歳までそこからは勝負できる武器がないとだめ」
- ・ 教育論文へ挑戦して感じた手ごたえ
- ・ 茨城県教育研修センターのスタイルへのあこがれ

2 長期研修中の一日

- ・ 長期研修生同士のふれあい
- ・ 人格的にも優れている担当の指導主事の先生からの専門的なご指導
- ・ センターならではの現場で実際に1単元実践することができる現地研修
- ・ 現地研修や研究発表会へ向けて、多くの先生方からのご指導
- ・ 所長先生をはじめとする先生方からのゼミナール
- ・ 幅広い識見を養うための全国の大学の先生の講義を聴けるオンラインラーニング

3 内地留学で取り組んだ研究・・・裏面参照

4 内地留学後に考えたこと

- ・ 余白
児童も教師も家庭も忙しすぎるのではないか。→働き方改革への挑戦。
- ・ 真正の学び
授業で学習したことをもっと身近な生活に生かせるようにしたい。
- ・ Cをつくらない
A評価をつくる授業からC評価をつくらない授業への転換
- ・ 学びの継続
今も長期研修中と同じぐらい学べているか？→読書量の増加、新しい挑戦へ。

【参考資料】

- 北俊夫 「社会科学力をつくる“知識の構造図”」
北俊夫 「思考力・判断力・表現力を鍛える新社会科の指導と評価」
澤井陽介 「澤井陽介の社会科の授業デザイン」
工藤勇一 「学校の『当たり前』をやめた」
石井英真 「未来の学校 ポスト・コロナの公教育のリデザイン」
堀哲夫 「一枚ポートフォリオ評価 OPPA」

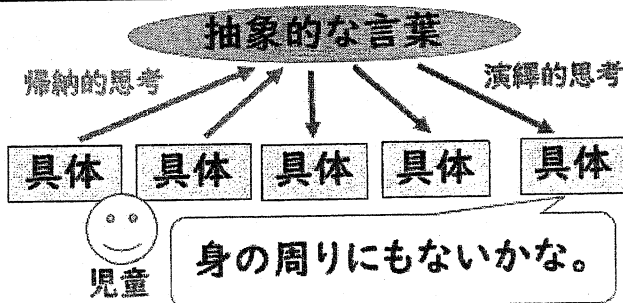
研究主題 社会的事象の特色を捉え、社会への関わり方を選択・判断する力を育成する社会科学学習指導の在り方
 — 小学校第3学年「火事から暮らしを守る」における、帰納的、演繹的に考えたり、自分たちの立場を踏まえた現実的な協力を考えたりする学習活動を通して —

研究の概要

社会的事象の特色を捉え、社会への関わり方を選択・判断する力を育成するためには、具体と抽象の行き来や、今までの学習を踏まえて考えることが重要である。本研究では、小学校第3学年「火事から暮らしを守る」において、帰納的、演繹的に考えたり、自分たちの立場を踏まえた現実的な協力を考えたりする学習活動を通して、社会的事象の特色を捉え、社会への関わり方を選択・判断する力を育成する社会科学学習の在り方を追究した。

研究の柱① 社会的事象の特色を捉えるために、具体と抽象の行き来をする。

具体と抽象の行き来
 社会的事象の特色を具体的な事実を踏まえて捉えられるようになることを考える。



「工夫」「協力」などの社会的事象の特色は抽象的に表現されることが多い。そのため、児童が社会的事象の特色を捉えるためには具体と抽象を行き来する必要があると考えた。そのような行き来をすること児童が授業で学んだ抽象的な言葉と身の周りの出来事を結びつけることも期待できるのではないかな。

研究の柱② 社会への関わりを選択・判断する力を育成するために、今までの学習を踏まえる。

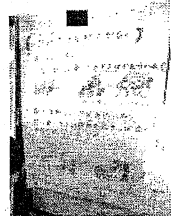
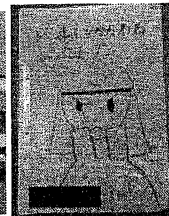
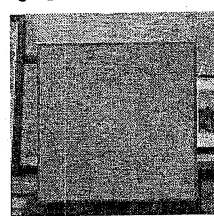
自分たちの立場を踏まえた現実的な協力を考える学習活動

「無理矢理に子供に解決策を考えさせるのではなく、現実の社会で解決しようとしている人たちの登場させて、その人たちの取り組みや発想をもとに考えさせればよいのです。」 (澤井陽介)

火事からまちを守るために自分たちの立場で協力できそうなことを今までの学習を振り返りながら考える活動

今までの学習を振り返り、考えるための手立て

3-実践



① 各時間の消防士、警察官、消防団の方からのメッセージビデオ

② 消防ひみつブック

③ 学習の記録

児童に自分ができることを表現させても、「消防士になる」「募金する」などの非現実的なことしか表現できないことが多い。そこで、授業で学習したことをもとに、児童が現実的に協力できそうなことを考えることが大切だと考えた。